根井　雅弘著
経済学の3つの基本
経済成長、バブル、競争

岩井　克人ほか著
経済学は何をすべきか

橘木　俊詔・広井　良典著
脱「成長」戦略
新しい福祉国家へ

多元性のなかのオルタナティブ

広く深い省察、制度から思想・理論にも及ぶ

塚本　恭章

新書判・109頁・680円
筑摩書房
978-4-480-68905-4

緯も想起されよう。古典派経済学者ミルの「定常状態」での人間的進歩の可能性を宇沢弘文の「持続的発展」論として紹介するスタンスは、後述の橘木・広井共著のそれと響き合う。

ただ本書でとりわけ着眼に値するのは、「経済学界で一般的に『真理』とみなされている観念」（69―70頁）を意味しうるガルブレイスのいう「通念（制度的真実）」にどう対峙すべきかを意識し問い直そうとする氏の精神そのものだろう。バブルと投機ブームをめぐる研究は無数に存在するにもかかわらず、人はなぜかいつもそれを繰り返す。異端派ガルブレイスの警告とその教訓的示唆としての「高度な懐疑主義」や経済成長至上主義に距離を置く主張があらためて強調されるのもそのためにほかならない。主流派であろうと異端派であろうと、そうした学問精神は共有すべきもの。本来の多元的な経済思想のあり方からみれば、そこには「オンリーワン＝ナンバーワン」の構図は成立しない。プロローグのワンフレーズ、「専門家がいままさに取り組んでいる問題の困難さと面白さの両方を伝える努力」（10頁）こそ正真正銘の「基本」なのだ。

興味関心ある読者は、経済学史上「脇役」でありながら、経済理論・思想において重要な貢献をなした人物を「主役」にすえて現代経済学の位相を描いた著者の『異端の経済学』（筑摩書房、1995年）に進まれよう（講談社学術文庫から『経済学再入門』という著者の新刊が4月上旬刊行予定。当該新書との趣旨もいて重要な貢献をなした人物を「主役」にすえて現代経済学の位相を描いた著者の『異端の経済学』（筑摩書房、1995年）に進まれよう（講談社学術文庫から『経済学再入門』という著者の新刊が4月上旬刊行予定。当該新書との趣旨も近く併読されたい）。

＊

猪木武徳氏の『経済学に何ができるか』（中公新書、2012年）を連想される読者もいよう。「何をすべきか」をタイトルに掲げる本書は、岩井克人氏ら日本の代表的経済学者による論考と対談を所収した意欲作。専門性の高い内容ゆえ一般読者には難解だろうが、啓蒙的価値もあり推奨される。

たとえば鶴・小林対談で示唆に富むのは、「経済学者だけでなく、現代社会では専門家に対する信頼感が低下していることについて考える必要がある」（91頁）という（鶴氏の）見識だ。専門家による知見の明確な不安を表明し、「定常型社会」ないし（政策的）有用性や現実妥当性を広く問い直し、異分野との学際的交流も介しながら経済学それ自体のイノベーションを説く大橋氏の提言とも通じ合う。「抽象化・単純化してきた経済学の研究の逆をたどり、具体的な政策事例や実務の文脈にあるように経済学者の方で作業を行う必要がある」（237頁）。

対談での興味深い指摘をもう1点だけあげれば、選挙のある政治家（政策決定者）の「短期の時間軸」と政策の実行・実現までの「長期の時間軸」との間の不整合性をどう解決すべきかというポリティカルエコノミー的問題であろう。日本独自のポリシー・インテレクチュアルズの開発（人材・制度）が急務ではないか。いわゆる官庁エコノミストとしての豊かな実務経験ももつ両氏の対談と大橋論考は、日本における経済学（界）と経済論争に「なぜ」が欠け、「どう」すべきかのための貴重な提言が数多く含まれている。

冒頭80頁近くに及ぶ岩井論考「経済学に罪あり」は、今次の世界金融危機の真因と含意・教訓を経済思想・理論的観点から系統的に総括し、「『見えざる手』の働きに全面的な信頼を置く、新古典派的な経済学の壮大な実験」（75頁）は壮大に失敗したと結論づける。そして資本主義と経済学の未来のためには、自由放任主義的思想から決別し、ヴィクセルからケインズに継がれる不均衡動学派的マクロ経済理論の再評価が鍵となるという。これは氏自身の研究原点に回帰することの必要性を宣言するものだ。論言は流麗で一著の感すらある。

われわれの資本主義経済が「本源的な」不安定性を内包するのは、それ自体が純粋投機の対象である「貨幣」が存在することの論理必然的帰結にほかならず、そうである以上、ル化に伴う経済安定性の二律本主義の「不整を直視し、実践策の遂行が不可「貨幣賃金の粘ンズ経済学」伸縮性＝新古典という単純なば、前者は「ころか後者のとみなされ、と る革新を正確

四六判・248頁・1800円
日本経済新聞出版社
978-4-532-35593-7

四六判・184頁・1900円
岩波書店
978-4-00-025925-5

ダルク研究会編著
ダルクの日々
薬物依存者たちの生活と人生

四六判・382頁・2000円
知玄舎発行・星雲社発売
978-4-434-18700-1

当事者たちはどのように生きているか

「回復」をめざす14名の人生と生活の語り

好井　裕明

ダルクとは何だろうか。本書によれば「薬物依存当事者たちが最低数か月にわたる長期の共同生活を送る中で、依存からの「回復」をめざす民間リハビリテーション施設」であり「スタッフもほぼ全員が「回復」途上の薬物依存の当事者であり、過去にダルクに入所していた経験をもつ者も多いことから、当事者中心の「自助（セルフヘルプ）」的な施設と呼ばれることも多い」という。覚せい剤や咳どめ薬を常用し、人生をスリップし、法を犯し、刑務所の入退所を繰り返す。なぜそのようなことをやめられないのか。薬物には無関係だと思っている大半の人々は、そう思い薬物依存の当事者のことをそれ以上考えようとしないし想像もしないだろう。テレビドラマに登場する依存者は、アウトサイダーや人生の落後者の典型として描かれるだけであり、ドキュメンタリーもまた製作者の意図の中で、当事者のある側面が強調されるだけだ。つまり、私たちは、薬物依存の当事者がどのように生きてきて、どのように考え、どのように「回復」を生きようとしているのか。彼らの生活と人生をほとんど知らずに、当事者のことを勝手に想像し決めつけているのだ。

本書には、薬物依存で苦しみ、そこからの「回復」をめざし、様々に生きている14名の人生と生活の語りが詰まっている。正直読み応えがあり、一度に読み切ることなどできないだろう。語りを読みながら、いくつかのことに気づく。まず序章にしっかりと論じてあるように、「回復」とは一定の状態が確保された段階のことではなく、つねに「いま、ここ」で達成されていく過程なのだということがよくわかる。一度クスリをやめることができたとしても、旧来の友人からの誘いで、また始めてしまったり、語りの中には、薬物から「クリーン」になれたことと依存にはまってしまうことの繰り返しのなかで、「回復」が達成されつあることが淡々と語られるのだ。そして、語りから明らかになるのは、薬物から「クリーン」になることは、ただ貧せい剤などの薬物を当事者が具体的に使用をやめてしまうことだけを指すのではなく、まさに薬物依存を「あたりまえ」のこととしてつくられてきた近しい人々や知り合い、仲間との関係、薬物を媒介して作られる人間関係がリセットされ、ひとりとの繋がりにおいて「クリーン」になるという事実なのだ。

いま一つ興味深かったのはダルクが入所した当事者に課している朝昼晩、1日3回行われるミーティングという実践だ。そこでは当事者が自らの体験や考えていることをしゃべり、参加者はただ黙ってそれを聞いている。いわば「言いっぱなし聞きっぱなし」の空間なのだ。誰からも意見や批判も言われないので、自分で好きにしゃべることができて、楽かといえば、まったく逆だろう。自分の体験やこれまでの人生について、毎日3回必ずしゃべるという営み。これは普段私たちが日常でまずやろうとしないことであり、当事者にとって、相当の負担を強いるものではないだろうか。ただ彼らは、ミーティングへの苦痛やしんどさを語りながらも、そのおかげで「回復」へ向かうことができたという評価をも語っているのだ。自分と同じように薬物に依存して生きてきた他者の語りにただ耳を傾けながら、彼らはそこで何を得ているのだろうか。またそうした実践を経て、彼らの生活と人生への志向や意味づけにどのような変化が生じていくのだろうか。ダルクの実践の中核にあるミーティングという空間の解読も、ぜひ研究会にお願いしたいと思う。

決して人に語りたくはないはずの自らの人生を語り、「いま、ここ」で「回復」を達成し続けようとする思いが詰まった本書。彼らとの関係をじっくりとつくりあげ、「ダルクの日々」を当事者の言葉の厚みから実感させようとする研究者たちの誠実かつ地道な姿勢に敬意を表したい。（よしい・ひろあき氏＝日本大学教授・社会学・エスノメソドロジー専攻）

橋本　周子著
美食家の誕生
グリモと〈食〉のフランス革命

「君が何を食べるか言ってみたまえ。君が何者であるかを言い当てよう」

「新しい御馳走の発見は人類の幸福にとって天体の発見以上のものである」

そんな名文句と共に、ブリア・サヴァランの名前は記憶にあるはずだ。あるいは、袁枚の『随園食単』と並ぶ食のバイブル、『美味礼賛（味覚の生理学）』の著者として。

ところで、そのサヴァランと同時代人にして、先行して食にまつわる本を書いた美食家がいる。グリモ・ド・ラ・レニエールである。この奇異な人物を通して、食とは、食べることとは考察したのが、本書、『美食家の誕生』である。京都大学の博士論文に加筆したものという。

サヴァランやこのグリモが生きた時代、十八世紀後半から十九世紀にかけての頃は、フランス革命とその後の混乱の時期である。つまり……。

「それまで王侯貴族や一部の富裕市民という、ごく少数の人々に限られていた美食の世界を民衆に解放した。パリではレストランの数が激増し、食料品店は溢れんばかりの商品で通行人を惹きつける。（中略）それは同時に、以前の時代にはほとんど発達することのなかった、〈食べ手〉による、料理についての専門的言説の誕生をも意味していた」

それよりも少し後、十九世紀の中ごろ、パリ万博の時に、今も続くボルドーワインの格付けが（ナポレオン三世によってだが）なされたのも、偶然ではない。大衆化というほどではないにしろ、より広い層へ贅沢が普及していく、時代の必然のようなものがあったのだろうと思わ

そして、そ
気を今に伝え
な一冊が、サ
味礼賛』という
リモはそれに
家年鑑』、そう
いる。食材か
ランについて
の年鑑である
誕生』の中に
あるが、そも

新たな視点で食
サヴァランと対極的

でも興味深
ュについて
的に考察し
およびシロッ
か、「食卓
係について
このあた
で、凝り性
ろうことが
金には困ら
家で、母親
だ、夫婦仲